

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 35 集 (2004年度) 2005年 3月発行 : 333-347

大学教育において卓越性と多様性の共存を目指すプログラムの開発
—アメリカ大学におけるオナーズ・プログラムの発展事例を中心として

田 中 義 郎

大学教育において卓越性と多様性の共存を目指すプログラムの開発 —アメリカ大学におけるオナーズ・プログラムズの発展事例を中心として

田中義郎*

第1節：はじめに

今日、大学教育では、高いスタンダードとアカウンタビリティ（学習成果に対する責任）の明確化を通じて、より高度な教育機会の均等の実現を目指すことが、期待されている。大学教育の大衆化が進行する中で、大学はこの問題と如何に向き合うのか。20世紀初頭よりアメリカの大学に顕著に見られるような優秀学生のための別トラックであるオナーズ・プログラム（Honors Program）のような仕組みを内包することで、多様性と卓越性の2つの目的の達成を同時に目指す方法を確立すべきである。社会の要請の中で、大学がその教育の多様性に十分な対応をしつつ、かつ、教育はもとより研究における卓越性において、伝統的な任務を現代的責務に照らして、同時に遂行できるシステムの構築を模索し、検討する。

2003年、新高卒者数128万人、大学志願者数74万人、大学入学者数58万人（入学率78%）である。1995年の入学率が64%であったことを考えると、その選抜性は著しく低下している。こうした時代、高校教育は完成教育としての意味を徐々に失い、大学進学を予定する教育へと変化していくと同時に、これまでの入学選抜試験が意味を失い、入学後の指導の為の情報収集、もしくは、学力による相性診断の意味を持つようになる。それは、社会に巣立つ準備をする期間が大学にまで延長されたという現実とそれを支えるシステムの構築（入学試験とその後の大学教育の有り方）を如何に準備するかがより鮮明となったものと理解される。しかしながら、ともすると、多様性の実現にばかり目を奪われ、大学が伝統的に担ってきた卓越性の継承に対する配慮を怠ってしまうことになる。

アメリカの大学には多様性を実現するための様々な仕組みが組み込まれているように思える。それらは社会の安定と発展を維持する手法の一つにも見えるが、その結果として、アメリカの大学は効率的で効果的な大衆化を実現できたのである。更に、卓越性をも担保する仕組みをも内包して来た。その一つにオナーズ・プログラムがある。例えば、後述するが、テキサス大学オースチン校（1883年創立で南部地区を代表する公立旗艦大学である）に毎年12,000人が入学してくるが、その内、150人はPlan II（プラン2）と呼ばれるオナーズ・プログラムの学生で、通常の入学基準よりも遙かに高い基準をクリアして入学してくる。彼らは、大学内で際立って優秀な教授陣から高次の学習経験を与えられ、むしろ多様性とは逆行する厳格なカリキュラムの下で、学業を発展させ、卒業後は、アメリカを代表する諸大学院に進学を果たす。優秀学生を更に育て、社会に輩出するシステムを内包することで、多様性の実現という大学の公共性（パブリック・サービス）の達成と卓越性の

* 玉川大学教育学部教育学科教授

追求を見事に共存させることになる。

第2節：NHS（National Honor Society:アメリカ・オナー協会）、ACHS（Association of College Honor Society：カレッジ・オナー・ソサエティ協会）、NCHC（National Collegiate Honors Council：アメリカ大学オナーズ委員会）等関連諸団体の設立と機能

Honor Code, Honor System, Honors Program, Honors College など、アメリカの大学教育には、Honor（榮譽）という冠が付いた呼称が数多く存在する。こうした呼称が頻繁に登場し始めるのは1920年代である。ジョージ・クー等の*Involving Colleges*（1991）によれば、Honor Codeとは、信頼、学生の責任、学問の統合に対する献身、から構成され、スタンフォード大学では、1920年代に学生によって始められ、学生と教員の双方に適用された、と書かれている¹⁾。

第一次大戦以前、ハーバード、イエール、プリンストン、コロンビアと言った主に東海岸に立地する私立諸大学では、オナーズ・プログラムの運用方法を模索しており、当時は、際立って優秀な学生に対する特別な機会としてであったり、奨学金に対する違いを立証するものであったり、と言った具合であったようである。こうした初期のプログラムは中身から推測するに、誰にでも等しく教育を提供しなければ、と言うアメリカの民主主義の平等の考え方に単に対抗しただけであったようにも見える。1922年、ローズ・スカラーとしてイギリスに学んだフランク・アイデロットが、オックスフォード大学で通常の学生とオナーズの学生が別々に指導を受け、高い知的刺激を受けて育てていることを経験し、スワスマア・カレッジ（ペンシルバニア州にある小規模リベラルアーツ・カレッジ）において、彼は初めてこのイギリスでの経験を実践した²⁾。

このスワスマア・カレッジの試みは、リベラルアーツの学習に焦点を当て、小規模授業、個別指導方式やセミナー形式の授業を採用し、卒業論文を義務付け、外部試験官による筆記および口頭試験を行い、現在のオナーズ・プログラムズのモデルとなっている。スワスマア・カレッジの英断の影で、他の大学はそれなりに苦しんでいたという記述もある³⁾。例えば、イエール大学の場合、オナーズ・プログラムの設置根拠をどこに求めるのか、「質と量の関係をどこで最適化するのか、特に、民主主義の社会において、形成的知性のレベルの区別をどこでつけられるのか」といった質問に対する回答に苦しんでいた。イエール大学は、結局、シニアの学生全員に卒業論文を課すこととなり、もっとも能力が高く、もっとも動機づけの高い学生たちのために考えられたプログラムを、一般化かつ平準化し、民主的に運用することになった。しかし、1930年には、少なくとも全米で93のオナーズ・プログラムが、個々の運用方法には若干違いがあったものの、実施されていた。

今日、優れた公立のオナーズ・プログラムの一つとして評価の高いテキサス大学オースチン校は、このアイデロット・モデルのオナーズ・プログラムをHonors College “Plan II”として1935年に創設している。

アメリカの大学の拡大もまたそうした活動を後押しする理由となったとも思われる。1920年代は、アメリカの大学が急速に拡大し、大衆化へと向かう時期である⁴⁾。1917年には、大学進学率(18-20歳)

が5%未満であったのがその後の20年間で15%にまで上昇している。実際、第一次大戦時と第二次大戦時の間では、約25万人から約130万人へと増加している。量的拡大と質の維持が現実的課題となり始め、二つの目標の実現を模索し始めたと言っても過言ではないと思われる。

NHSアメリカ・オナー協会の設立が1921年であり、オナーズ・プログラムズの拡大に触発されたAHCSカレッジ・オナー・ソサエティ協会の設立が1925年であることを考えると、1920年代は、こうした大学の組織的活動を活発化させる環境が整ってきた時期であることが伺える^{5) 6)}。また、その中等教育部門であるNJHSアメリカ・ジュニア・オナー協会は1929年に設立されている。NHSは、学業、リーダーシップ、奉仕、シチズンシップ（市民性）などの領域で優れた成果を成し遂げた大学生を対象に活動を展開してきた。そして、NJHSは中高生を対象にしている。活動内容はいずれも年齢に即して、以下のとおりである。「学業に対する熱意を創出し、奉仕する意欲を触発し、リーダーシップを向上させ、人格の形成を醸成することを目的とする。」NJHSの場合、加えて「シチズンシップ（市民性）の育成」がある。NHSもNJHSも共に、大学や学校の外にある教育関連団体であり、教育振興を目的として奨学金付与の活動などを積極的に展開して今日に至っている。

一般に、オナー・コードの場合、学業成績と連動して、卒業時に表彰の対象となっている場合が多く、卒業時に3段階のオナー・コードが適用される。Summa Cum Laude（最優秀）トップ5%以内、Magna Cum Laude（優）トップ10%以内、Cum Laude（秀）トップ20%以内、となっており、表彰の対象となり、大学ではもちろん、希望すれば前出のNHSなど個々の社会団体に登録され、生涯記録されることとなる。

さて、一方、NCHCアメリカ大学オナー委員会は、オナーズ・カレッジを通じてオナー教育を運営する大学が構成する団体として1966年に設立された⁷⁾。彼等が定義するオナー教育の特徴（1994年3月の運営委員会において確認）は以下の通りである。

- 学部学生の特別な能力や必要性に応えるべく慎重に選られたプログラムであり、明確に判別される水準（成績、テスト得点、エッセーなど）によって特定された学生集団が対象である。
- プログラムは、ミッションに定められた目的やその責務に照らして、組織構造上、管理の観点から、また、教育研究上の観点から、位置付けが明解にされていなければならない。こうしたミッション、もしくは位置付けの後ろ盾は、適切な予算措置による安定した運営を可能にするとともに、教員や管理者の思い付きや一時的な献身によって物事の流れが変化するような状況を避けるのに効果的である。「真に優れたプログラムを展開する」ということを組織的取り組みとして具体化すべきである。
- プログラムの責任者（所長）は、学長もしくは教育担当副学長に報告する義務を負わねばならない。
- ミッションおよびプログラムの必要性と合致する特別なコース、セミナー、コロキウムと連動したカリキュラムを擁していなければならない。
- プログラムに参加している学生は、学部での総取得単位数の15%以上で概ね20-25%をプログラムのために用意された科目を履修する。このプログラムを成功の内に終了する学生たちは、

- 相応の認定証を大学から授与される。相応の成績証明書が授与され、卒業式では別名簿にてオーナーであることが表示され、オーナーが明記された学位記を授与される、といった具合である。
- プログラムは、大学での学位獲得のための全ての活動（一般教育の履修要件を満たす、など）、ピーク分野での科目履修、専攻分野での科目履修、プロフェSSIONALもしくはプレプロフェSSIONAL分野での科目履修と効果的にかつ体系的に連動していなければならない。
 - プログラムは、全学的に学生や教員のために優れた教育のモデルや水準を提示して組織全体を通じて、具体的に見える、評判の良いものでなければならない。
 - プログラムに参加する教員は、プログラムの目的を熟知していなければならない。彼等は、プログラムに相応しく教授技能に秀でていることはもちろん、才能豊かな学生たちに知的リーダーシップを与えられることで、慎重に選ばれた教員たちでなければならない。
 - プログラムでは、専用の図書室、読書室、コンピュータ、およびその他の諸施設などが整ったオナーズ・センターを適切な場所に設置すべきである。
 - プログラムの所長や管理者は、プログラムの運用を実際にさせる既存の学部や学科の委員会や教員たちと密接に連絡を取り、何ごとも協議すべきである。
 - プログラムは、プログラムの運用はもちろん評価や開発をも積極的に進めて行くためにオーナー担当の教員の委員会とオナーズ・プログラムに参加している学生が構成する委員会との調整の場を持つべきである。こうした学生は運営に対して学生が持つ要求や懸念を代表して、委員会を運営し、その自治を楽しむべきである。その中には、学生会を組織し、顧問として運営委員として委員会に加わるといったことも含まれている。
 - 力量のある優れた教員やスタッフによるオーナーの学生に対するアカデミック・カウンセリングが与えられるべきである。
 - オナーズ・プログラムは、それ自体突出しており、通常教員が試したくてもなかなか試すことのできない授業をも、実験室のように試すことができる。その試みが成功すれば、晴れて通常の授業での実施も可能となる。この場合、オナーズのカリキュラムは、将来において、全学的に運用する教育の諸実践のプロトタイプとの認識で行われるべきである。
 - 良く作られたオナーズ・プログラムは、当該機関のもっとも優秀な学生に見合った優れた教育を提供するという特別な立場を維持し続けるために、継続的な検討を行い、変化に対して柔軟で、かつオープンでなければならない。
 - 良く作られたオナーズ・プログラムでは、全米各地で開催される様々な学会やオナーズ・セメスター、国際プログラム、地域貢献、その他の体験的学習に学生が参加するといった機会の提供など、オナーズの教育の過程で参画という性質を強調すべきである。
 - 良く作られた2年制および4年制のオナーズ・プログラムは、2年制大学のオナーズ・プログラムの卒業生を4年制大学のオナーズ・プログラムに編入で受け入れることのできる環境を、編入要件の検討の上、両者の間で合意しておくべきである。

現在、同委員会が発行する *Honors Programs & Colleges: The Official Guide of the National Collegiate*

Honors Council, Peterson, 2002) によれば、加盟校数は全米で約580校（その内、公立が8割、2年制大学が3割）となっている。

第3節：オナーズ・プログラムズの創設事例

ーテキサス大学オースチン校とニューヨーク市立大学（CUNY）

1) テキサス大学オースチン校とオナーズ・プログラムズ

ー大恐慌以降、アメリカのリーダー養成を目指す公立大学の野心⁸⁾

テキサス大学オースチン校は、1935年にPlan IIというオナーズ・カレッジを開設し、非常に成功している事例であり、その実績から高い評価を受けている。

50 Hours: A Core Curriculum for Colleges Students (1989) の中で、NEH (National Endowment of the Humanities) のリン・チェニー理事長は以下のように表している⁹⁾。

「1935年に創設されたテキサス大学オースチン校のPlan IIは、おそらく全米でもっとも良く知られている（構造化されたコアカリキュラムを有する）プログラムである。毎年、150人程度の学生が入学し、厳格なスケジュール管理の下で多くの機会を得ている。彼等は、学部学生に特に必要とされるプログラムと必修で、小さなクラスで、大学内で突出した優秀な教授によって、教育を受けている。」

また、卒業生は、「文学、芸術、哲学、宗教学、経済学、人々と国家の政治の授業。Plan IIは、真に、スイス・アーミーナイフを全開したかのごとく、職業生活はもとより人生に必要な教育基盤を充実した形で提供してくれた。」と、感想を述べている。

「なぜ、Plan IIを選ぶのか？」、テキサス大学オースチン校のPlan IIのガイドには、以下のよう
に書かれている。

「Plan IIは、壁のない教育である。大学生活の前半に広い範囲のコア・カリキュラムを学び、後半に、学生自らの選択による専攻での学びをする形での4年制の学士プログラムである。テキサス大学オースチン校は学生たちの欲求を満たすに足る大きな自由と図書館やコンピュータ設備などの優れた施設や設備に象徴される大規模大学であるにもかかわらず、ここでは、小さなクラスと共通カリキュラムは、学生の中に密接なコミュニティ感覚を発達させる。Plan IIの目標は、生涯学習に足る心を育て、優れた市民となる準備をさせることにある。1936年にこのプログラムを始めたパーリン所長は、学生は専攻の必修科目履修要件に縛られて自らを狭めることなく、広く学ぶべきであると信じていた。Plan IIは、全ての好奇心を歓喜させる。コアは、文学、哲学、社会、自然科学の全ての分野に渡り、個人の実生活にもっとも意味のある形で提供される。知識間の壁を自由に行き来し、新たな発見を模索する。Plan IIの学生は、人間の感性を最適な形で発達させ、詩の鑑賞から

物理学や宇宙論の最新の発見に至る学びを作る。」

こうしたプログラムには誰が入学できるのか、問われることになる。アドミッションは、テキサス大学オースチン校に通常入学してくる高校生とは違った分離型のアドミッションが行われており、入学志願書もまた違っている。高校での成績がトップ5%以内であり、かつSATの得点が1,400点以上(通常の学生は1,080-1,300点)となっている。この数字を見る限り、プリンストン(1,360-1,540点)やハーバード(1,400-1,590点)と肩を並べることのできる学生を集めている。

Plan IIは、人文、社会科学、芸術、自然科学の各分野を含むコア・カリキュラムで構成されている。Plan IIの卒業生は、ギリシャ哲学、世界の文学から量子力学、DNAの構造に至る幅広い分野のテーマを取り上げた一般教育を受けていることが評価されている所以である。卒業に際して、彼等は、獲得した研究手法や文章作法を駆使して、「卒業論文」という形でテストを受ける。Plan IIの学生は確かにコア・カリキュラムという形で一般教育を中心に学ぶが、学生の多くは、特定の分野で、第2専攻という形で、専門分野の選択科目を履修している。毎年、医学部に進学することを目論む学生は、Pre-med(医学部進学課程)という形で自然科学分野の科目を履修しているし、第2専攻では、ビジネス、工学、英語、建築といった分野が見られる。

Plan IIオナーズ・プログラムは、個別支援とコミュニティを大切にしている。「小さなクラスと共通カリキュラムは、学生の中に密接なコミュニティ感覚を発達させる。Plan IIの目標は、生涯学習に足る心を育て、優れた市民となる準備をさせることにある。テキサス大学オースチン校は学生たちの欲求を満たすに足る大きな自由と図書館やコンピュータ設備などの優れた施設や設備に象徴される大規模大学であるにもかかわらず。」と言われるように、専任のアカデミック・アドバイザーが2人、経験を積んだピア・アドバイザー、教員アドバイザー(所長と副所長を含む)が、学生と定期的に関わっている。アドバイザーの職務は、学期毎の履修科目を選んだり、その後の科目履修計画を策定したり、卒業論文の執筆計画を立てたり、就職に役立つその他の専攻分野の科目履修を企てたり、といった活動である。彼等は、大学全体を網羅しているアドバイジング・サービス部門のオリエンテーション・アドバイザー、キャリア・アドバイザー、海外研修アドバイザー、精神保健カウンセラーなどと密接に連絡を取り合っている。

結果、Plan IIで学部教育を終えた卒業生は、概ね、全米各地の顕著な研究大学の大学院に進学する傾向にある。卒業生のその後の職業に顕著な傾向は見られないが、法律家、公務員、医者、会社役員、小説家、詩人、文筆家、研究者、異色だがロックミュージシャンといった風に極めて多様であり、このプログラムの学びの広がりを物語っている。

同時に、「大規模公立大学の中に存在するアイビーリーグ・カレッジ」という表現は印象的である。

2) ニューヨーク市立大学(CUNY) マスタープランとオナーズ・カレッジ

—公立大衆化大学の中に「旗艦環境」の創出を目指して

「教育を受けた人はいったい何を知らないか？」CUNY(City University of New York)、ニューヨーク市立大学は、古来からの挑戦に立ち向かうことを決めた¹⁰⁾。「2001年秋、CUNYは新たにオナーズ・カレッジ(University Scholars Program)を設立した。大学とニューヨー

ク市の資源を最大限に利用して密度の濃い学部教育を展開することを目的とした。このプログラムの参加者は、豊かな学術的、社会的、文化的活動とともに、海外研修に必要とされる諸費用をも授与される。さらに、新生には、各人に1台ずつアップルコンピュータのiBookが供与され、学術的活動を支援することになる。」

実際、このUniversity Scholars Programは、マシュー・ゴールドスタイン総長が考え出したものである。彼は、「全米で第3番目の規模を誇る公立大学であるCUNYに最優秀の若者を入学させること。特に、通常、アイビーリーグの大学に入学している若者をCUNYに迎えること。」を考えた。CUNYは、真に「教育を受けた人」を育てるためにCUNYの全キャンパスを横断する高次の質を持ったプログラムを開発した。現在、7つの4年制キャンパス（Baruch, Brooklyn, City, Hunter, Lehman, Queens, Staten Island）がこのプログラムを展開している。

2001年に始まったCUNYのオナーズ・カレッジの概要は以下の通りである。

- 授業料全額および生活費など諸費用の支給。
- 学部、大学院、プロフェッショナル・スクールにおいて、顕著な賞を受賞している優れた教員の
高次の授業およびセミナーの開設。
- 「文化パスポート」として、ニューヨークで催される様々な豊かな文化活動（演劇、コンサート、美術、科学、歴史）への無料入場。
- 芸術、科学、ビジネス、政府などの機関や団体でのインターンシップの機会の提供。
- 海外研修など、豊かな教育経験のための諸費用の支給。
- 各人に1台ずつコンピュータ（アップルコンピュータiBook）を供与。
- 全米各地で開催される学会や大学の催しに参加する機会を提供。

*実際、授業料以外で支給される諸費用は年間7,500米ドルとなっている。

希望者は、まず、CUNYの通常の入学願書とともに、オナーズ・カレッジへの入学願書を通常希望のキャンパスに提出する。審査基準は、高校の成績、SAT/ACTの得点。エッセー、推薦状（学業特性および個性等を踏まえて）、稀に、面接、の結果となっている。定員は100人である。ちなみに、U. S. News & World Reportの*America's Best Colleges*, 2004の資料を利用して概観すると、彼等のSATの平均値は1,351点であり、この数字は、ニューヨーク市にあるアイビーリーグ大学のコロンビア大学（1,300-1,500点）、ニューヨーク大学（1,230-1,420点）と同等であり、CUNYキャンパスワイドの一般学生のSATの平均値が860-1,230点であることを考えると、全国区型大学のトップ10校の入学者に相当するレベルの入学者を確保できていることになる。

このオナーズ・カレッジは、「CUNY Master Plan 2000（マスタープラン 2000—将来展望）」がきっかけだった¹¹⁾。「将来展望—キャンパスワイドのオナーズ・カレッジで高選抜カレッジを設立し、旗艦大学環境を創出する。」とある。その中で、2000年9月、アメリカにおける顕著な高等教育機

関としての地位を可能にする戦略を提示した。大学のそうした目的を達成するため、学部のリベラルアーツとサイエンス、大学院、プロフェッショナル・スクールのプログラムの中で全米で突出した分野を育て、「旗艦環境」を構築することであった。特に、高次の質がCUNYにアメリカの大学において他に見られない特色ある役割を果たせる分野を育てることであった。

強力な学問分野を構築し、旗艦環境を作り上げるCUNYの努力の中心は、専任教員の補充と専任と非常勤の教員比率を改善することであった。この要求は、学部生の授業での非常勤教員担当比率が高いこと（4年制大学で48%、2年制大学で49%、1998年度）から明らかであった。非常勤教員による授業への過度の依存は、本来の教育の有り方に逆行しており、高等教育における最大の懸念事項の一つとしてニューヨーク州の評議員会でも指摘されていた。専任教員を増やし、専任／非常勤教員比率を改善するために、大学は、優秀教員を新規雇用すべく5ヵ年計画を立てた。「クラスター雇用」と言って、強化すべき分野を特定し、その分野の教員を戦略的に比較的短期間で補充するといったことも行った。

大衆化した大規模大学が見せる「公共性を犠牲にしない卓越性追求のための戦略」、そうしたムードの中で、2001年秋にオナーズ・カレッジは高選抜プログラムとして、旗艦環境の中に埋め込まれた。選抜に際しては、誰も差別感を味わうことなく、また、大学全体の利益をも損なうことないように配慮された。

第4節：オナーズ・プログラムを巡る今日的動き —新しいオナーズ・プログラムズの誕生と発展

New Honors Programs, その言葉どおり、新しいオナーズ・プログラムズが誕生している。才能豊かな若者たちに、安く、高品質、高レベルの大学教育を提供する公立大学の戦略が顕在化し始めている。

1996年9月16日に発売された*U. S. News and World Report*の記事に“The New Honors Programs”がある¹²⁾。

毎年、数多くのアメリカの若者たちは大学進学を志し、大規模な公立大学はまるで高等教育の巨大なショッピングモールである。それらは、比較的入学し易く、比較的安価に、誰にでもあった授業を提供し、あまり個別対応はしない。長い間、優秀で才能溢れる学生の個別の要求に応じてこなかった。公立大学の中で、オナーズ・プログラムズを創設し、ブティック形式の教育を行うことで、長い間欠落していた部分を改善しようとしている大学が増加してきている。

1990年代の前半まで、優秀で才能溢れる学生であっても、小さなクラスで質の高い授業を望めば、費用はそれなりに掛かる（奨学金ですべてを賄うことは難しい）が、著名な私立大学のオナーズ・プログラムズを選択するしかなかった。*U. S. News and World Report*が紹介している学生、ロビン・ペインターの事例はそのことを物語っている。

「ジョージア州ピーチツリー市のマッキントッシュ高校でトップ3%に入っていた彼女は、SAT

で1,480点であり、自分にあった大学を探していた。ワシントン市の名門ジョージタウン大学、アトランタ市のエモリー大学、など優れた私立大学に奨学生として入学が許可された。しかし、これらの大学から提示された奨学金は彼女や家族（機械工の父と州公認看護婦の母）にとって必ずしも十分ではなかった。そこで、彼女は、比較的費用の掛からない公立大学であるジョージア大学のオナーズ・プログラムズに入学することを決めた。前出の私立大学が提供する高レベル、高品質の教育と同等のものを提供してくれるか否かは保証の限りではないが、授業料は完全免除であり、ジョージア州の宝くじ事業の収益によって提供されていた。宝くじに感謝である。ジョージア州では、州民の学生であって、高校での成績の平均がB以上であれば、仮に、公立のジョージア大学に進学すれば、授業料は全額免除であり、また、毎学期、教科書代として100米ドルが供与される。現在、ジョージア大学のアセンズのキャンパスで歴史とロマンス言語を専攻しているペインターは、振り返って、3年前の決定を残念がる。と言うのも、仮に、ジョージタウン大学、エモリー大学に進学できていれば、もっと個別対応の授業を数多く受けることができたし、もっと親しく教授たちと関わることもできたに違いない、からである。」

ペインターにとっては、より小さなクラスでの親身なきめ細やかな指導が望みであったに違いない。ジョージア大学では、新入生5,000人の内、約10%未満がオナーズ・プログラムに登録できる。オナーズ・プログラムの入門の授業は、1クラス平均20人程度であり、通常のクラス規模が100人を超えていることに比べると小さくなっている。ジョージア大学のような大規模大学では、大きすぎて不安を覚えるが、オナーズ・プログラムは、大規模研究大学の長所と小さなカレッジの長所の両方を備えている。」と言う学生もいる。つまり、大規模大学のオナーズ・プログラムの学生の利点は、より多くの教員を知ることができ、活動を共にすることもできる点である。彼等は、通常の学生に比べて、確実に、教員たちからより多くの個別の指導を受けている。通常の学生では、アドバイザーの名前すら知らない場合があるのに対して、オナーズ・プログラムの学生は、アドバイザーと放課後ラケットボールを楽しんだりしている、と言った具合である。こうした関係が、コミュニティ意識や刺激のある学習環境を育む一助となっていることは事実のようである。

「*IVY League Programs at State School Prices* (州立大学の経済負担でアイビーリーグ大学の教育を)」(Robert R Sullivan, Karin R Randolph, Prentice Hall, 1994) といった本が出版される所以である¹³⁾。

そうした中で、IUP (Indiana University of Pennsylvania) のように、学生数1万人を超える規模の大きい大学で、オナーズ・プログラムと寄宿制教育をハイブリッドして、特定の寄宿舎でオナーズ・プログラムの学生が共に暮らすことで、更に優れた学習環境の提供に力を注ぐ大学も登場している。

こうした試みは、大規模公立大学が、質が高く小規模だが経済的負担は大きい私立大学から優れた学生を取り戻すことになるかもしれない。実際、SATで1,400点以上を獲得する優れた学生が、公立大学のオナーズ・プログラムに入学するようになっており、結果、多くの公立大学がこうした傾向に参加してきている。

こうした傾向の発端の一つを前出のIUPの事例に見ることができる。1990年代初頭、西ペンシルベニア州にある5つの州立大学の一つで、伝統的に地域の教員養成を担ってきたこの大学は、入学

者数の減少に伴い、予算の削減、教員の補充の凍結など、経営危機に直面した。IUPに限らず、公立の教員養成系大学はどれも似通った問題に直面していた。新たな試みを起こし、新たな存在価値を見出す必要に迫られており、誰もが「ニッチ (niche)」を探していた時に、地域密着型のオナーズ・プログラムが、「高品質、高レベル、少人数で、しかも、格安」で創出されたと言うのも頷ける¹⁴⁾。

テキサス大学オースチン校のPlan IIの伝統とはシナリオは異なるものの、IUP、CUNYなど、新たな試みが始まっている。

第5節：おわりに

—アメリカ大学のオナーズ・プログラムとわが国の高等教育の展望

2004年4月1日、国立大学は国立大学法人〇〇大学となった。法人格を持ち、新たな歴史を刻み始めた。国公立といつたこれまで程の枠組みに縛られることなく、比較的柔軟に各々の裁量で大学の経営に取り組むことになる。大衆化、ユニバーサル化が進行する中で、多様化は当然のように進行する。しかし、その中で卓越性を如何に保証し、リーダーシップを発揮できる人材の育成を如何に行うのか、については更なる工夫が期待されていることも事実である。

アメリカ大学におけるオナーズ・プログラムの経験は多様性と卓越性に共存の道があることを示唆している。すなわち、大学教育をより多くの人々に開くとともに、大学教育が伝統的に担ってきた優れた社会人材の育成という二つの目標を達成することである。このことで、社会人材のスタンダードを向上させ、平均的に高次の教育を受けた数多くの人材を社会に送り出すことができる。同時に、社会が求めるアカウンタブルな人材、特に、各領域のリーダーとして活躍し、新たな社会創造を手掛けることのできる人材をも社会に送り出すことができる。こうした試みは、我が国の大学が、個々にその機能を認識し、与えられた機能を最適形で実践することを通じて、大学が社会的機関であることを再認識させてくれる。我が国の大学のマスタープランを描く上で、多くの示唆を与えている。

【注】

- 1) Kuh, G. and others (1991) *Involving Colleges*, Jossey-Bass.
- 2) Rudolph, F. (1977) *Curriculum*, Jossey-Bass.
- 3) Ibid.
- 4) Thelin, J. R. (2004) *A History of American Higher Education*, Johns Hopkins University Press.
- 5) NHS & NJHS (2004) “All Aboard the Express to Success”, NHS & NJHS.
- 6) NCHC (2004, June 5) “NCHC: Basic Characteristics of a Fully-Developed Honors Program”, NCHC Executive Committee.
- 7) Ibid.

- 8) UTO (2004) “Plan II Honors”.
- 9) NEH (1989) *50 Hours: A Core Curriculum for College Students*, NEH.
- 10) Apple (2004) *Education-Profiles in Success: CUNY Honors College*.
- 11) CUNY (2000) “CUNY Master Plan 2000”, CUNY.
- 12) *U. S. News & World Report* (1996, September 16) “New Honors Programs”.
- 13) Sullivan, R. R. (1994) *IVY League Programs at State School Princes*, Prentice Hall.
- 14) Selingo, J. (2000, November 17) “Facing New Missions and Rivals, State Colleges Seek a Makeover”.

Developing Programs for Pursuing Excellence and Diversity in Higher Education: “Run After Two Hares and Catch Both.”

– Developing Honors Programs in American Colleges and Universities and its Practices

Yoshiro TANAKA*

Today, higher education in Japan is expected to serve the public and the individual as well. Because of quantitative expansion and massification, the traditional method of selection by written examination does not mean what it used to in Japan. The expansion in enrollment has been facilitated by relaxation (or deregulation) of policies with regard to higher education, allowing institutions to accommodate growing numbers of students. Enlargement of the private sector became an answer. However, a growing number of first generation of higher education graduates has raised questions of the usefulness of the traditional selection system by the entrance examination. The educational experience through k-12 must be considered more seriously than before. A portfolio-based high school and college articulation program has been highlighted. For similar reasons, a FYE (Freshman Year Experience) program has also been highlighted. Under these circumstances, private higher education has become more popular and significant.

Then, quality and quality assurance issues were raised with regard to the global standards of higher education. The WTO issue also influenced it by talking of trade in educational services and attitudes towards foreign providers of higher education, including professional education.

Under these circumstances, “Developing Programs for Pursuing Excellence and Diversity in Higher Education” becomes seriously significant in Japan. And, the experience from “Developing Honors Programs in American Colleges and Universities and its Practices” must be considered as a basis for a model of Japanese higher education.

This paper has identified some honors programs like those of the University of Texas at Austin, and the City University of New York. U.S. News & World Report says, “Public universities have offered easy access, relatively modest prices, a something-for-almost-everyone range of courses-but comparatively little in the way of individualized attention. Long aware that they were not adequately serving the needs of the best and the brightest of their students, an increasing number of public universities are attempting to remedy this deficiency by launching honors programs that are the equivalents of educational boutiques. As a result, public universities are attracting more and more high-achieving students.” The majority of Japanese colleges and universities are private, but they may try to follow this practice, because, this is a way to attract more and more high-achieving students. However, as Yale University discovered in its early stages, such honors programs can develop into an issue of how best to reconcile quantity with quality; indeed, of how to cultivate

* Professor, Comparative and International Higher Education, Tamagawa University

intellectual distinction in a democracy.

To “Run After Two Hares and Catch Both!” is not easy, but creatively we can perhaps creatively build the way to achieve it.